哲學研究　第二百四號　第十八卷第三號

シェリングの積極哲學について（承前）

赤松元通

第三章　神話の哲學

第一節　一　神論

神話的過程は先きにも述べた如く人間の宗教意識の發展に於ける必然的一般階である。「神話は高き勢位に於いてくり返されたる、自然の歴史」である。(XIII, S. 492) 從つて自然に於いて働いた所の勢位は高き形に於いて、此れに於いて又働きそして此れらこそが神話の本質的構成的要素であつて神話的過程を動かす眞の原因である。神話は單なる構想や思ひ付きではなくして、必然的な、卽ち意識に於いて自ら發

展する所の神統記的過程と云ふことが出來る。

本來の神話は卽ち多神論であつて此れは人間意識に於ける神統記的過程であるが故に、一神論は神話の哲學には直接關係がないと思はれるが、然し一神論は神話的過程の根源として既にそれの法則や理解のかぎを含んでゐるが故に、此邊に簡單に述べておかうと思ふ。

先づ神の概念に關係して宗教的な三つの考方がある。卽ち有神論 Theismus と汎神論 Pantheismus と一神論 Monqtheismus である。有神論にとつては神は詳細なる規定なく全然普遍性に於いて存在する。有神論と汎神論とは全 Pan なる點に於いて、有神論と一神論とは一 Monos なる點に於いて共通する。從つて汎神論と一神論とは或意味に於いて同じものを表はしてゐる、卽ちそれらのテーマは同じく全一性であるが、前者は全一なる本質を、後者は全一なる人格を表はす。從つて一神論は汎神論と全然反對なるものでもなく(淺薄なる神學者の中には兩者を全然對立させるものもあるが)又同一なるものでもない。眞の一神論はむしろ汎神論の克服に於いて成立する。有神論や、又普通の一神論は神に於ける差別を知らない。汎神論は此れを知るが、然し此れらの差別は汎神論に於いては重要なものではない。眞の一神論に

於いてはそうではなくして、神に於ける此の差別が重要であつて、此れが宇宙的意義を以つた發展を產むのである。此の差別は神の自然に於いて含まれたる全であつて、神自身はその絕對的自由に於いてかかるものから、又かかるもの以上に高まるのである。「汎神論そのものはその單なる可能性に於いては神性並びに凡ての眞なる宗敎の根基である。此の點に汎神論の魅力があるのである。……」尤もシェリングの汎神論は神に於ける勢位を認める點に於いてスピノザのそれとは區別しなければならぬであらう、スピノザ主義に於いては上昇、生きた過程の理念が缺けてゐる。

眞の一神論的な考方に於いては神は單なる一ではなくして神として一である。此れは眞なる神としてもしくは神性上一であるが、然し多を許さないものではない。此の神に於ける多が勢位である。從つて勢位は神に於いてあり、神の本質に屬してゐる。故に此の神は全一なる者である。勿論此れら諸勢位の何れも獨立には神そのものではない。勢位は云はば神的存在のモメントである。從つて此の全一性の更に詳細なる規定は三一性である。

所でかくの如き根源的神的統一はかの根源的行による緊張によつて顚倒せられて宇宙が生じ、神に於ける過程は人間意識による自然的なる神外的過程となり、此處

に本來の一神論は終つて多神論の世界となるのである。

第二節　多神論

神統記的過程は二種を區別することが出來る、神に於けるそれと神の外に於けるそれとである。前者は神に於ける自然の發展として此の發展に於いて神自身が自己を發展せしめる意味に於いて勿論神統記的過程であるが、此れは云はば永遠なる神統記である。後者は人間意識に於ける神意識の發展、卽ち意識に於ける神の指定者の過程で此の意味に於いてやはり神統記的過程である。此れは時間的神統記である。神話はかかる神統記的過程に外ならない。神そのものは諸勢位の統一として全一なるものであるが、然し人間意識の誕生によつて此の根源的統一は破られ、諸勢位は獨立的となる。かくて此の分たれたる神、分たれたる全一、卽ち勢位の多に對する人間の關係からして人間意識に於いて多神論が生ずるに至る。多神論にも同時的多神論と繼起的多神論とが考へられるが、多くの神々はある一つの神に從屬することなしに同時に共存し得ないが故に同時的多神論は相對的一神論と見ることも出來る。此れに反して後者、卽ち諸々の神々、及び神々の系統の繼起こそは眞の多神論、卽ち神話の內容をなすのである。

要するに神統記的過程卽ち神話は人間が既に失ひたる根源的神的統一を、眞に人格的なる神を此の世界に於いて求めんとする過程である。此の神統記的過程は根源的創造に於ける開闢論的過程を繰り返へす。

吾々は先きに根源的存在はかの形成されざる、暗き、無制限的なる存在Bであること、此れは世界並びに凡ゆる事物の根本素材であつて、此れに於いて諸勢位が神的な完全な存在を產出するのであると云ふこと、又此の存在Bは天の星辰や星雲に於いて尙ほ保たれ持續されてゐると云ふことを知つた。神話的過程も亦此のBを以つて始まるのである。此のBは神話的過程の根柢であるのみならず、前キリスト敎的啓示の根柢でもある。神話に於いては意識の自然的な力によつて、前キリスト敎的啓示に於いては神の啓示の働らきによつて、此のBから始つて絕えずより完全なる神の意識が產出されるのである。

勿論此の獨立なるBから始まる以前、換言すればBの支配以前に根源的狀態として諸勢位に對して云はば浮動の狀態としての根源的意識の狀態が豫想せられる。此れからして本來の神話的過程へ移り行くのである。

扨て過程の第一の時期としてはB卽ち實在的なる原理のみの支配の時期が考へ

られる。此のBは勿論自然の根柢にひそめるかの原理であつて、それが意識に於いて再び高まつて來てそれを支配するに至つたのである。人間は此の期に於いては全く此の原理の手に歸する。人間卽ち精神の本質は從つて自然からではなくして自然の元初、否自然以前の時に連つてゐるのである。何となればかの原理そのものは決して自然ではなくして、むしろ自然の根柢であり、自然に反する暗き原理であるが故である。此れはその無制限な全能に於いて、無制限な存在に於いて凡ゆる自然の否定であり「如何なる人間も見ることの出來ない神の顏」である。(XIII, S. 386) 此れに對して此れをもとに返さんとする原理との鬪爭によつてかの根源的な自然の生成が行はれる。第一に成つたものは星辰の體系であるが、自然の此の時期に相應するものが神話的意識に於いてはかの星辰宗敎、もしくは星辰崇拜 Zabismus である。

意識は先づ創造の根柢Bをばある神の形に於いて表象する。此れが神話の最初の形、その根柢としての天神 Himmelsgott である。此れは諸民族の未だ分化せざる、全人類の神であつた。かかる神を吾々はエジプト人の Nu 前カルデア人の Anu 前ヴェダ時代に於ける印度人の Djaus 支那人の天ギリシア人の Uranos 等に於いて見るのである。最も古き此の宗敎は星辰を一體として崇拜すると云ふ意味に於いて一神

論とも云ひ得るが、前にのべた如く勿論眞の一神論ではなく、云はば分割され、獨立的となつた多神論に對して相對的一神論にすぎない。

第二の時期は此の原理Bが次の高き勢位によつて從屬させられるが然し尙超克せられざる時期である。卽ち實在的なる原理が高き原理に近づきそれに對して素材となる時期である。天の主であり、男性である所のウラノスがより高き原理を許すことによつて受動的となり、可能的な克服の素材として現はれることによつて此の原理は女性的なものとなる。天の王が天の女王、卽ち Urania となる。此のウラニアの理念こそ本來の神話への移り行き、その第一の根柢である。星辰崇拜はそれだけでは尙ほ非神話的で、繼起的多神論によつて始めて神話が成立するが故である。ウラノス、或は星辰崇拜の神は成程後の神の繼起の第一項に當るものではあるが、それに於いてはまだかかるものとしては指定されてはゐない。ウラニアに於いて此の繼起への移り行きがあるのである。星辰崇拜としてはエレメントは尙ほ分立しないのであるが、此れが分立し、物質化せられて物質的な諸星崇拜となるに從つて純粹な星辰崇拜から離れ、本來の神話的形體に入るのである。ウラニア崇拜はペルシア人(Mitra) アッシリア人、バビロニア人(Mylitta) アラビア人、ギリシア人(Aphrodite)等

に存してゐる。

此の女性的なウラニアの出現と共に既に第二の勢位が得られてゐるが、かくして現はれる神は丁度吾々のA^2に相應するものである。アラビア人では此の第二の物質化されたウラニアに對して精神的な更に高き神をばウラニアの子として規定してゐる。ヘロドトス此れを既にディオニュソスと呼んでゐる。（此れは勿論ギリシア人のディオニュソスと同じではないがギリシア人のディオニュソスにも最後には現はれる所の一般的な勢位である）ディオニュソスは吾々の第二の勢位に當るものであり、それの規定はかの第一の粗暴な、人間を自己疎外せしめる原理を克服し、意識を再び此の原理の暴力から救はんとすることにあるのである。即ち此れは解放的なる人間を自由にする神である。此の神の働きは意識に於いて唯だ繼起的に實現せられるので、從つて一歩一歩克服せられるべきかの原理に對する關係は、そのモメント毎に違つたものとして現はれる。此の故に同じ神であり乍ら全く違つた種々の表象も起りうるのである。（神話に於ける諸々の矛盾も此れによつて說明せられるであらう）同じ神であるが種々のモメントに於ける現象の仕方は別々のものである。要するにディオニュソスの時代はその前の時代が粗暴な放浪的な生活であるに對し

て眞に人間的な生活の時代であり、從つてディオニュソス神は眞に人間的な神である。然し乍ら此れに於いても人間的意識は尙ほ充分には恢復せられず、第一の原理に尙ほ固着してゐるのである。

第三の時期は一般的には既に克服され、又されうる樣になつた原理と自體へ歸り行く原理との鬪爭の時期である。此の時期が又三段階に分れる。

第一段階は意識が解放的なる神の働きに反抗し、從つて前の時期に從屬せしめられたる原理が再び働き出す時期で、此の再び働き出す原理は又男性的原理として表象せられる。此の神は從つて唯一性を保ち、不動にして强固、高次の原理の働きを拒斥し、愈々强固に自らを守る所の神である。フェニキア人ではバール Baal カナーン人ではモロッホ Moloch ギリシア神話ではクロノス Kronos として表はれる。此れは他の高き(解放的な)神に對して實際の地位を與へることを欲せず、從つて此れは神としては存在し得ずして、人間と神との間の不可解な中間物として現はれるのである。此れを吾々はフェニキアの神話に於いて見出すが、彼らは此の神をメルカルト Melkarth と呼んでゐる。フェニキアのヘラクレスである。ギリシアのヘラクレス Herakles も此れに由來する。フェニキアのヘラクレスは神話を奪はれたる子であり、クロ

ノスは眞の父に代り、そして此の父を意識から放逐したる誤れる神である。クロノスは人間によつて再び惹き起されたるかの原理であつて此れは子から、存在ではないが働き(神としての)をば奪ひ、子としての關係ではなく奴隷としての關係のみを殘すのである。此の故にヘラクレスは勞働と苦惱とを負はされ絕えず苦鬪しつつも、而かも人類に慈愛ある神となるのである。

第二段階は此の不羈なる神クロノスが前のウラノスの如く再び女性的となる時期である。此の女性的形體は先づフリギア人 Phrygisch に於いて現はれたキュベレ Kybele によつて示される。

ウラニアによつて神話的過程はその繼起に於いて始めて可能となつたが、キュベレと共にそれは更に現實的となつた。そして更に第三段階に於いて神話は始めて完全となるのである。一體神話的過程の眞の原因はかの三勢位に外ならないが、今此の第二段階は第二の勢位によつて第一の勢位が全く克服される段階であり、そしてキュベレがその終りをなしたが、此處に於いて始めて第三の勢位が現はれることとなるのである。かくて三勢位そろつて神話は完全なる形體をなすのであるが、然し此の中又何れの勢位が特に支配的であるかによつて種々の形をとるのである。

此の完成した神話としては一、エジプト神話、二、インド神話、三、ギリシア神話がある。

エジプトの神話には尙ほ盲目的原理に對する激しき鬪爭、從つて尙ほ此の盲目的原理の强力なる存在が表象せられてゐる。此の神話に於ける中心的原理はテュフォン Typhon である。此れは凡ゆるものを呑み込み、又は燒き盡し、分たれた自由な有機的なる生命を嫌ふ所の原理である。此のテュフォンに對するものは善なる、或はより善き神オシリス Osiris である。始め此の鬪爭は或はテュフォンが或はオシリスが破碎される等、勝敗は甚だ不定であるが遂に第三の勢位なるホロス Horos の出現と共にテュフォンは敗れるのである。此の精神的なるもの、善なるものの物質的なるものからの從つて又死からの解放、靈魂の不滅の敎がエジプトの神話並に宗敎のテーマであつた。此の神話の第四の神はイシス Isis である。此れはウラニアに當る女性神にして、ホロスの母であるが精神的な原理ホロスを產むことによつてテュフォンとオシリスとの鬪爭に終りを告げしめ、自らはテュフォンの後を追つて黃泉に下るのである。

要するにエジプト神話に於いて第一勢位はテュフォン第二勢位はオシリス第三勢位はホロスである。(イシスはテュフォンの意識そのものと見られうる)此れが此の神話

的過程の中心原因としての形相的な神で他の神々は此の鬪爭によつて、又此の鬪爭に於いて生れた偶然的な素材的な神々である。動物靈、動物神なども現はれてゐるが、此には星辰崇拜ツアビスムスに於ける派生的な諸星神に當るものである。此れも創造に於ける自然過程のある時期に於いて動物が現はれるその必然性を以つて神話的意識に現はれるのである。

印度の神話は此のエジプトの神話に丁度正反對の立場にある。エジプト神話に於いては意識は尙ほかの實在的原理、凡ゆるものがそれを周つて動く所のかの暗き中心に固著し、そして此の原理は苦惱と涙とを以つて辛じて精神的なる原理に變へられるのであるが、印度神話に於いてはその意識は既に全くかの中心を離れ、しつかりした落ち付きを特たず云はば酩酊、浮動の狀態と見られるのである。印度の意識に於いては全過程の根柢である所のかの元初の原理は高き原理によつて完全に克服され、無にせられてゐる。印度意識に於いてかの元初の原理に相應する勢位はブラマ Brama である。此の神は印度に於いては——單に外面的に神話を考察し解釋せんとする人々には不思議であるが——全く影がうすれ、殆んど見られないと云つてもよい、高々、像もなく、神殿もなしに崇拜せられてゐるにすぎない。此れは過去の神

である。勿論此の過去もエジプトのテュフォンが過去、オシリスが現在、ホロスが未來の神であると考へられるのとは別の意味である。例へばテュフォンに於いては死の國へ行つたとしても尙ほ宗敎的意識の深き底に於いて尙ほ崇拜され、犧牲も供へられるのであるが、ブラマはそうではない。彼はも早や印度の民族信仰から消え去つたのである。此の神の代りに印度では第二の神シヴァ Schiva が現はれた。此れは破壞卽ちブラマの全き破壞の神として、その無制限な働きによつて宗敎的意識を全く解消した。成程印度の意識に於いては第三の勢位卽ち靈 Geist としての深慮の勢位があり、此れは第三の神ヴィシュヌ Wischnu に於いて現はれるのではあるが、然し印度に於いては此れら三者は尙ほ一つに結びつけられてゐない。(エジプトに於いては最後に一つの大なる意識に統一される)ヴィシュヌの勿論崇拜者、禮拜者を持つが、然しシヴァの禮拜者とは結びつかず、互に排斥し合ふ。印度の意識に於いてはヴィシュヌはそれの眞の前提卽ちブラマとシヴァとを自らの中に取り入れずに、却つて排除したが故に、印度意識は此の精神的勢位の高き段階に於いて自らを固持することは出來ず、此處より一轉して說話に——ヴィシュヌの化身——進むのである。此れはも早や本來の神話ではなくして假構 Erfindung である。此の化身の一つとしてクリシュ

ナ Krischna がある。

印度神話に於いては尙ほ恢復されなかつた所の眞の中心へギリシァ神話に於いて始めて還り行くのである。印度に於いては最後は全く破壞、卽ち分解であつて、諸々のモメントは全く有機的統一なしに存在した。從つて此れが統一に達せんが爲めには本來の神話的過程以外の方法によらねばならなかつた。此處に又印度に於いて絕對的虛無主義の起る理由もあるのであるが、此れをさけんとして彼らは更に高き精神的な統一を得んとしたのである。然るにギリシア人に於いてはかかる統一は神話そのものによつて媒介せられたものである。

ギリシアに於ける此の內的破壞は旣に外的にも表はれてゐる。印度の神々は醜であるがギリシアの神々の特質は美であると云はれる。ギリシアの神々は實在的なかの原理の暴力から溫和に、そして正當に離れる所の意識から成立する。かの實在的な原理は成程此れに於いて消えはするが、然しその消え去る時、否消え去つても尙ほ働いて、新しく生れるものに實在性と規定性とを與へるのである。此の故にギリシアの神々は必然的な永遠なモメントの代表と云ふことが出來る。ギリシア神話は實在的原理の靜かなる死 Euthanasie である。此の原理は此の際自らの代りに美

しき現象の世界を殘すのである。ギリシアの神々は肉身ではない、人間の樣に肉も血も持たない。動物的なるものは此處にはない。此の神々は成程人間の運命以上のものではあるが、然し全く人間的なる存在である。かくてギリシアの神話の段階はかの自然の歷史に於いて自然の原理が、動物界に於ける激しき鬪爭の後、人間に於いて靜かに死する所の段階に相應してゐるのである。

扨てギリシアの神話的意識に於いて始めて眞の、過程の原因としての諸勢位が再びその統一にもどされるのであるが、此の精神的なる統一の中、第一に現はれるものは正にかの暗き實在的原理そのものである。此れは過程中は自己外 ausser sich に存在するものであるが、今やその自體 Ansich に從つてその神性に還つたのである。

此の自體(精神性)に還つた神は幽界に入つたアイデスもしくはハーデス Aides, Hades である。ハーデスは二つの方法で考察されることが出來る。一つは彼が見えなくなる卽ち幽界に入るモメントに於いてであつて、此處に於いては彼は單にあるモメントの神を代表するにすぎず、從つてその限りに於いては素材的な神に屬するのである。かくてハーデスはギリシア神話に於いては第三の神、卽ちツォイス Zeus とポサイドン Poseidon の下におかれてゐるのである。そして彼が第二勢位に反抗し

乍らも、克服せられて遂に幽界に入ることによつて、ツォイスを主とするかの同時的多神卽ちオリュンポスの神々が生ずるのである。從つてオリュンポスは夫故に又ツォイス自身はハーデスが身を隱したことにもとづくのであり、彼が若し再び現はれ、もとの地位を恢復するならば――丁度かの自然に於いて、今は靜められ、おほはれて見えなくなつてゐる所の原理、如何なる被造物も見ることの出來ないかの顏が再び向け返へられる場合の如くに(此の場合には恐らく凡ゆる自然並びに自然物の多樣が再び破壞せられるであらう)――恐らく神々の世界は破壞せられるであらう。然しハーデスはも早や此の一定のモメントの神ではない。彼が見えなくなること、正にその事によつて彼は意識に對して、かかる神卽ち凡ての神々に於いて、ウラノスにもクロノスにも、今や神々に王なるツォイスにもある所のもの(凡てのものの自體)として表はれるのである。意識はハーデスをば凡ての神々の一般的根柢、實在神一般として、從つて全過程の根柢に存し、それを動かしてゐる所の純粹勢位、純粹原因として認めるのである。かかる神に於いて意識は神の一般的概念に到達したのである。此の限りに於いてはハーデスは素材的な個々の神ではなくして一般性であり、此の一般性に於いてそれは他の勢位を除外せず、そして此れら諸勢位こそ本質的な眞の

原因となるのである。此れに對してかの外的な神が偶然的な派生的な神として見られるに至るのである。

かくの如く解して始めて後に密儀に於いて起る樣に、外的な素材的な神々から解放されて、意識が內面に向ひ、純粹原因である所の精神的な神々の意識に向ふ點を理解することが出來るであらう。素材的な神々は公開的 exoterisch なものであるが、精神的な神々は秘儀的 esoterisch な意識の內容となる。公開的な神々は外的な神々であるが、秘儀的な神々は內的で隱れたるものであり、此れは神話の眞の秘儀である。勿論此れは完全なる神話と共に生じたものであつて從つて公開的方面と秘儀的方面とは同時的な現象として兩立するものであつて、決して一方が他方を否定することは出來ない。公開的なるものは常に秘儀的なるものから、又反對に秘儀的なるものは常に公開的なるものから生ずるのである。

第三節　ギリシア密儀

神話的過程は屢々のべた如くかの暗き實在的根柢が漸次に克服され、精神化されて行く過程であるが、此の克服が宗教的意識にとつて女性的、母性的な神の形に於いて現はれると云ふことも前述の如くである。此の女性神としての第一段階はウラ

ニア、第二はキュベレ、第三はデメーテル Demeter である。此れらの女性神は新しき未來を準備し、自らの子として克服者を產む。ウラニアはクロノスを、キュベレはツォイスを、デメーテルはディオニュソスを。

ディオニュソスは眞に人間に自由を、幸福を與へる、親しみある神の典型である。彼は獨占的な不氣嫌な神ではなく、多樣なるもの分たれたるものの神であり、成長の神、發展の神であるのみならず此の神はそれ自ら發展し、成長するのである。ディオニュソスは神話に於いてはゼメーレ Semele の子となつてゐるが密儀に於いてはデメーテルの子となつてゐる。扨て此の神については三つの發展段階を區別することが出來る。第一は過去の暗、幽界へ退いたディオニュソス、第二現在地上に於いて支配せるディオニュソス――テーベのディオニュソス卽ちゼメーレとツォイスとの子なるディオニュソス、第三來るべき未來の支配者としてのディオニュソス此れがデメーテルの子としてのディオニュソスである。下界のディオニュソス卽ちペルセフォネ Persephone の夫としてはツァグロイス Zagreus ゼメーレの子としての葡萄酒並に葡萄の神としてはバッコス Bakchos デメーテルの子としてはヤッコス Jakchos と呼ばれる。此の三つのディオニュソスの中バッコスのみは公開的（エキゾテリッシュ）で公然と賑やかに祭られたが、ツァグロイス

とヤツコスとは秘儀的(エレウシニッシュ)で神秘的で、エロイジスの密儀 eleusische Mysterien に屬する。

クロノスの如き壓迫的な暴力的な支配のもとにあへいでゐた人達にとつては、親しみ深き、自由なディオニュソスの如き神に會つたことは實に有りがたい、喜ばしきことであつた。彼らの感情が朗らかなむしろ歡喜の絶頂にのぼつたのも無理ではない。エキゾテリシシュなディオニュソスの祭は實にかかる意識の現はれである。又此のディオニュソスの行列の中には色々の動物の形をなせる神々も從ふが、此れらは人間がディオニュソスによつてそれらから自由にせられたものである。

かくの如き壓迫的な力から解放的な力へと進むことが凡ての神話の根本思想であり、そして此の解放的なる神の典型がディオニュソスであるが故に、ディオニュソスの概念は凡ての神話にとつて本質的な内在的なものであり、此れなくしては神話は全く考へられないと云つても過言ではない。勿論此の事は次に述べるデメーテル、ペルセフォネについても云ひ得るのであるシェリングによればデメーテル、ペルセフォネ、ディオニュソスの神話は單なる個々の偶然的なるものではなくして神話一般の根柢である。ディオニュソスなくしては神話は目標を持たない、デメーテルなくしてはそれは進展を持たない、ペルセフォネなくしてはそれは發端を持たないのである。

扨てデメーテルは先きにも云つた如く過去から未來への移り行きに於いて表はれ、從つて過去と未來とに分たれ、過去に尙ほ從屬するが既に未來に向ひ、更に高き勢位に進む所の宗敎的意識が神話に於いて表はれるのである。從つて此の神の中には尙ほ古き神、過去の暗、幽界の神へ歸り行くべき部分があるが、此れが神話的にはデメーテルの娘ペルセフォネとして表はれる。デメーテルはペルセフォネをハーデスに渡すのであるが、此れは決して自由意志ではなく、むしろハーデスによる奪略である。此の、過去を失つて而かも尙ほ新しきものによつて充されざる宗敎的意識が過去への憧れ、現在に對する憤りと悲しみとなる。此れが悲しみに充ち、新しきを求め、憤る所のデメーテルである、此れはディオニュソス＝ヤッコスの誕生によつて始めて慰められ、和解されるのである。

凡ての神話の主觀的な起始をなすもの――此れはギリシア神話に於いて始めて表はれ、又神話的意識に到達したのであるが――はペルセフォネの神話である。ペルセフォネの意義は前にも述べた如く、暗の國へハーデスによつて奪はれる事、卽ち人間意識のかの根源的なる墮落を神話的に表はしてゐる點にあるのである。此の事は既に新プラトン主義者も、人間精神が靈的なる狀態から墮落して肉體に宿るこ

との表現であるとして説明してゐるのであるが、シェリングによれば新プラトン主義者の墮落觀は單に寓話的のものにすぎないが、彼自らはそれを根本事實として説明するのである。

扨てギリシアの密儀に於いては主として以上の三神卽ちデメーテルとディオニュソスとペルセフォネの神的なる惱みと救の歷史が中心となつてゐるのであるが、此の過程が夫々神の三つの形態によつて示されてゐる。卽ち母性神としてのデメーテルはウラニア、キュベレ、デメーテルとして、解放する所の神としてのディオニュソスはツァグロイス(ハーデス)バッコス、ヤッコスとして、墮落從つて又救濟の象徵としてのペルセフォネとしてはデメーテルの娘としてのペルセフォネ、次にハーデスの妻としてのペルセフォネ、最後にコーレ Kore として再生せる(ヤッコスの妻としてのコーレにペルセフォネが現はれると考へられる)天上界のペルセフォネとして示されてゐるのである。卽ち重き足どりでさまよひつつ憧れ、悲しみ、憤りつつも、最後には心の惱の充されたデメーテル、惱みと死とによつて若がへり復活し行くディオニュソス、ハーデスに誘惑され、その手に陷り、最後に無垢なる形に於いて蘇つたペルセフォネ。

此れらの神秘的な神々の物語に含まれてゐる從つてギリシア密儀の內容となつ

てゐる重なるものは未來(個人の並に人類全體の)の秘密である。從つて密儀は二樣になる、卽ち第一の密儀は死後の生活、ハーデスもしくは下界に於ける彼岸の世界、第二の密儀は未來の宗教、此れは上界に於ける彼岸の世界である。そして此れらがエロイジスの密儀をなすのである。

エロイジスの淸祓によつて死の恐怖は除かれ、未來の淨福が準備せられるのである。淸祓を得ない人々はハーデスの泥の中に落ち込むが、淸祓せられた人々は神々の側に至る。プラトンがフェードロス Phädros に云つてゐる樣に人間は肉體以前の狀態に於いては眞實在、汚れなき美の世界を直觀したが、肉體的な現世に於いては感性的なそれの模寫によつて純粹なる美を想起し、此れによつて靈感にまで高められるのであるが、勿論然し、かかる人々の中でもテュルゾス Thyrsos を持つ人は多勢あるが眞に神に醉ふ誠のバッカンテン Bacchanten は少い。密儀はかの感性の深い暗に引き込まんとする不思議なジレーネの唄とは反對に天上の美しき世界へ引き上げんとする云はば逆のジレーネの唄である。(XIII, S. 458)

露魂の根源的な狀態が又それの終局目的である。諸々の純化と淨化によつて此の世の道がそこへ通ずるのであるが、此れには人が此の世の誤り多く、影の世、夢幻の

世なることを悟つて、眞理を追求しなければならぬ。唯だ內的なる眞理愛(ソクラテス的淸祓)のみよく此れに至らしめるのである。

密儀の目的とする所の淨化は精神をば肉體に縛りつける所の物質や欲情からの精神の解放に外ならない。長い間のさまよひの後デソーテルが救はれることや、惱みと死とを通して最後に淸淨と神聖とを克ち得たディオニュソスのことは淸祓者に對して人生の鬪爭の最後の目標を示すのである。從つて密儀の一般的な敎說としては宗敎的意識の歷史、客觀的に云ふならば、最初その根源的な非精神性から發して完全なる精神性にまで自らを淨化し行く所の神そのものの歷史に外ならない。勿論密儀に於いては此の敎說は敎說としてではなしに歷史として、尙ほかかるものとしても單に實際の出來事を通してのみ表はされてゐるのである。從つて密儀の內容をなすものはかの暗き盲目的なる存在をきりぬけつつ進む神の苦惱の敍述そのものである。密儀に於いて敎へられた他の凡てのことがらは神のかかる歷史から單に導かれたるものである。(XIII, S. 494ff.)

此の神の惱の歷史の體認に於いて人間は解脫し得るのである。人間にとつて惱ましき、恐ろしき、不安なる事どもを神自身が經驗し、又耐へたのである。人生の不幸

や不運は單に人間のみのものではない。此の凡ゆるものの大なる不運を、神自身も惱みつつ榮光にまで至らねばならなかつた所の道を、眞に悟り得た所の人はもう人生の一般的な不幸に對してどうして悲嘆し得るであらうか。」(XIII, S. 503)

扨てエロイジスの人々に於いて此の三位一體的な神性[1]はアナケス Anakes(最高支配者)と呼ばれてゐる。最高の支配は唯だ一でありうるが故に、此の神は繼續的な世界支配者であつて、その時代は過去と現在と未來とに分れるのである。過去はペルセフォネとハーデスに、現在はデメーテルとバッコスに、未來は將に來らんとする神ヤッコスに屬する。神秘的なる此の最後の神こそ本來のエロイジス的なものであつて、此の神の到來が最高の祝祭の對象である。此の密儀は大小二つに分れる。卽ち淸祓の準備(小)と完成(大)もしくは發端(小)と最後(大)である。小祭式はペルセフォネに對して大祭式はヤッコスに對して行はれるが、此の移り行きとしてデメーテルの祭式がある。かかる未來の神の祭式に神秘的な未來の期待、人類を救濟する未來の宗敎の期待が結びつくのである。

1、ザモトラケの神カビーレン Kabiren もやはり繼續的な三一性に於いて考へられることが出來、そしてその神祕的なる本質はエロイジスの神と同一である。此の事は既に神話の哲學への機緣を與へたと云はれる彼の論文「ザモトラケの神々」に於いても說かれてゐる。

尙ほ此のディオニュソスに反對したるものとしてオルフォイスOrpheusがある。シェリングは此のオルフォイスも單に一神として考察せず、一つの一般的な原理として見てゐる。此れは公開的(エキゾテリッシュ)な神話に反對する、從つて反ホメロス的な從つて又密儀に近き一方向である。ホメロスをも此處ではシェリングは一人物とせずに一原理、卽ち公開的な神話の完成、異敎Heidentumの完成を表はす原理と見やうとしてゐる。從つて此れに對してオルフォイスは暗き原理、東邦的なる原理を代表してゐるのである。一方又オルフォイスの反對したるディオニュソスは決して後の高き密儀に於けるディオニュソスではなくして、粗野な公開的なディオニュソス卽ちバッコスであつた密儀に於けるディオニュソスは此れらの矛盾を調和して高き密儀的統一にまで至ることが出來たのである。此處に至つてオルフォイス敎徒も亦此れに與ることが出來たのである。

第四章　啓示の哲學

第一節　啓　示

宗敎的意識は前述の如く、神話的過程卽ち異敎を經て必然的にキリスト敎的過程

に至らねばならぬ。人間的精神にとつて自然は前提であつて此れなくしては精神は存在もしなければ理解もされない。丁度此れと同樣に、超自然的と考へられる啓示にとつては自然的に生產される宗敎としての神話が前提でなければならぬ。啓示には超自然的なるものがあるとすれば同時に又それの前提としての自然的なるものへの關係が存するのである。

扨てキリスト敎の內容をなす所の啓示は一つの事實、神的なる意志行爲である。此れを吾々は唯だ體驗し、經驗することによつてのみ知ることが出來るのである。然る後それは又理解され、研究されることが出來るのである。啓示は經驗である。此の啓示、神的意志行爲を明かにし、研究することが啓示の哲學である。所で此の啓示の事實は正に神から墮落した人間が再び神に還され、神に宥和されたと云ふ點にある。此の宥和或は和解はキリスト正確にはキリストの人格によつて起つた。それ故此の人格がキリスト敎の眞の內容をなすのである。キリストは啓示の最後の目的であるのみならず、又それの發端であり、眞の原因であるが故に、實にキリストに於いて啓示は云はば收め込められてゐるのである。それ故啓示の哲學の課題は正に此のキリストなる人格の研究に外ならないのである。キリスト敎に於いて現は

れたる啓示は異教、及ユダヤ教を通して來たものである。キリスト教は異教の眞理であると云ふことが出來る。

かくの如くキリスト教はキリストの人格を中心とするものであるが、此のキリストの人格が現はれるには勿論、時が熟さなければならなかつた。現在の形に於いてキリストが現はれる以前にも勿論キリストはなかつたのではない。キリストはあつたが然し隱れて居り、尙ほキリストとしては現はれなかつた。キリスト教の啓示に於いて彼は始めてキリストとして現在したのである。世界は此の世の時であつて、それ以前には創造以前の世の時が先立ち、又此の世の時以後には此の世界の沒落後の世の時が續くのである。此れらの時は然し決して普通の時ではない。むしろ永遠なる時である。吾々は單なる一時的(無常的)なる時と永遠なる時とを區別しなければならぬ。無常的なる時とは常に同じことを繰り返す時であり、目的なき生滅であり、決して前進せずして回轉する所の輪であり、何物もそれに於いて成就せられない時である。「天ケ下には新しきものなし」と云ふ諺のあてはまる時である。かかる無常的なる時は決して眞の繼起ではない。此れに反して永遠なる時は眞の繼起である。此の時は過去、現在、未來の三つに分れる。そして此れらは夫々その目的並

に永遠なる內容を持つのである。かかる充實せる時をシェリングはアエオン Aeon 卽ち世代 Weltalter と呼んだ。現在の此の世も一つのアエオンで、それの永遠なる內容は卽ちキリストである。從つて現在の人間の歷史も亦單に無目的な、盲目的なる前進ではなくして窮局的なる目的を持たなければならぬ。此の目的は人間的意識に於けるキリストの完全なる現在に外ならない。

扨て知と信との關係についてシェリングはキリストの信仰は決して盲目的な信仰ではなくして知に照されたる、完全なる洞察にもとづけるキリストの人格の完全な探究にもとづく信仰なることを强調してゐる。眞の信仰は知の發端でもなく、又補充でもなく、況んや附加物などではない。むしろそれは知の果實であり、結果である。知も亦それが憩ふべき最後の目的を持たねばならぬ。此れが信仰である。かかる信仰は啓示の目標であるのみならず、又啓示の哲學の目標である。それは哲學的信仰、又は哲學的宗敎である。シェリングは宗敎の段階として異敎、ユダヤ敎、キリスト敎の外に尙一つ哲學的宗敎を附け加へてゐる。此れはキリスト敎の根基そのもの、もしくは啓示の本質そのものの理解、悟入に於いて成立つ。此の知は勿論悟性的知卽ち自然的知であることは出來ない、啓示そのものより湧き出でた知信未剖の

知慧、云はばグノーシスとも云ひうるであらう。ユダヤ教に於いては成程キリスト教的眞理が異教よりは明かに現はれてはゐるが、然し尙ほそれらは夫々の仕方で神話的であり、又同じく法則(一方は自然法、他方は戒律)によつて支配され、まだ眞の精神の自由に達したのではなかつた。此れら兩者がキリスト教に對する關係は丁度神話が啓示に、律法が福音に、理性が信仰に、自然的宗教が超自然的宗教に對する關係である。從つて宗教の段階も自然的、超自然的、哲學的となる。哲學的は勿論まだ存在しなかつたものである。此れへは神話的宗教、啓示宗教によつて歷史的に媒介せられるのである。神話的宗教は必然的な過程によつて產出されるが故に、盲目的な、不自由な、非精神的な宗教である。啓示はそれが非精神的な宗教をば內面的に克服し、かかるものに對して意識を自由にすることによつて、それ自身自由なる宗教、精神の宗教を媒介する、そして此れは唯だ哲學的にのみ完全に實現せられることが出來るのである。(XI, S. 255) 卽ち自由なる宗教もしくは哲學的宗教はキリスト教によつて媒介されるのであつて、決して此れによつて直接に定立されるのではない。意識はかの自由なる宗教に進み行かんが爲めに、再び啓示から自由にならねばならない。(XI, S. 258) 此處に於いて啓示も亦眞に自由ならざる認識の源泉となるのである。

吾々はキリスト教をその眞の本質に於いて、その全體性に於いて理解せんが爲めに、それを説明せんが爲めに、啓示から自由にならねばならぬのである。

「私にとつてはキリスト教は、私が説明を試みねばならぬ所の單に一現象にすぎない。」(XIV, S. 201)

第二節　キリスト論

かくの如き意味での説明の對象となるのは先づキリストの人格である。扨てキリストの啓示の固有の形は彼の化身Menschwerdungである。此れは然し神の化身ではなくしてキリスト卽ち神から分れ、獨立したる、神との合一から離されたる、從つて神外的な存在者である樣な神的人格の化身である。かかる存在者は勿論神に等しくはありうるが、然し決して此れを欲せず、むしろ獨自の意志から彼の神性を棄て、自らの身を下し、神に歸依して人類の爲めのみならず、人類に代つて身を犧牲にしたのである。此の點に化身の秘密と動機があるのである。實際キリストの人格の神性を否定する人にとつては新約聖書は勿論閉ざされた書物であるが、又かかる人格の神外性を否定し、又考察しない人にとつてもやはり同樣である。

次にキリストの地位についてシェリングは特に媒介的、中間的なることを强調し

てゐる。キリストの全事業は此の神と人間との中介的地位にあると云ふことに基づいてゐる。此の地位なくしては兩者の媒介もしくは融和は不可能であつたであらう。又此の根本事實の洞察なしには全新約聖書も理解されないであらう。

從つて吾々はキリストの人格に於いて次の三モメントを區別しなければならぬ。一、神との合一に於ける彼の先在 Präexistenz 二、神よりの區別、分離に於ける彼の先在、三、彼の神への還歸までの化身及感性界に於ける現在。

此れらのモメントは勿論繼起的に表はれるが故に、此處にキリストの歴史が考へられる。此のキリストなる人格の發展史——フィッシャーの云ひ表はしによつてクリストゴニー Christogonie と呼ぶならば——クリストゴニーの研究がキリスト論 Christologie となる。かかる意味のクリストゴニーには歴史研究の範圍を離れた、それに矛盾する事實、即ち彼の先在に關するものも屬するのである。此の種の凡ての事實も、若しその繼起がキリストの人格にではなくして、此の人格の信仰に歸せられるならば、即ち若しそれらがキリストの歴史に於ける繼起的出來事としてではなくして、キリスト教的信仰の根源的歴史に於ける繼起的な表象、即ち理解の仕方として考へられるならば、歴史的(ヒストリッシュ)に理解することが出來るのである。事實上のキリストの高貴

と神性が先立たなければ所謂教義的神話も成立することは出來なかつたであらう。キリストの人格が現實的で歴史的であると云ふことに、實に神話を啓示、異教とキリスト教との著しき相違があるのである。キリストは決して單なる現象ではなくして、彼は他の人間の如くに生きたのである。彼は生れ又死んだ。そして彼の歴史的存在は他の歴史的な人格と同じ程に確實である。(XIV, S. 229 f.)

然し此のキリストの歴史的實在性が彼の超自然的な生起、前世界的存在、此の世の奇蹟、死後の奇蹟、復活、昇天等に對する關係は如何。

キリストの前世界的存在は決して教義的神話ではなくして事實である。此れはヨハネ福音書が説いてゐるが、啓示の哲學は此れを基礎づけるべきであり、又基礎づけうるのである。

ヨハネ福音書のテーマはロゴスなるキリストである。神的なるロゴスはそれの化身以前には神外的な存在を持たないが故にシェリングのキリスト論と此のヨハネ福音書のそれとには矛盾があると思はれる。故にシェリングの課題は此の福音書殊にその序詞(I, 1—18)を解釋して矛盾を消失せしめ、キリストの前世的並に化身に至るまでの此世の歴史を吾々の眼前に現はすと云ふこととなるのである。神外

的な存在は神的なロゴスには屬しないが故に、此の福音書は又かかるロゴスを取り扱ふことは出來ない。ヨハネのロゴスは神的なる神の言葉Schöpfungswortでもなく、又神的知慧の人格化でもなく、アレキサンドリアの哲學のロゴス等でもなくして、かの福音書の著者の取り扱はんと欲したテーマにすぎない。此れは始め漠然と與へられるが、後には漸次に明確に限定されるに至るのである。

ロゴスは先づ永遠なる存在である。ロゴスの存しなかつた時點は考へられない。ロゴスは神と共にあり、それ自身神的である、卽ち神より區別はされてゐるが神の中にある。それは創造に於いて啓示し、秩序づけ、形成する原理として働いてゐる。「萬物此れによつて造らる、造られたるものに一つとして此れに由らで造られしは無し。」シェリング的に云ひ表はせばロゴスは第二の勢位、造物主的勢位である。此れは彼の前世界的存在である。然し又彼自身の中に生命がある、此れによつて彼は獨立的な存在となるのである。卽ち人類の救濟の爲めの獨立的、神外的な存在である。「此れに生あり。此の生は人の光なり。」此れらの言葉がシェリングによればロゴスの前世界的、神外的存在を示してゐるのである。ロゴスは此の世に於いて――前キリスト教的並に異教的世界に於いても――啓示的原理として働いた。然し異教は盲

目で彼を認識しない、ユダヤ教も彼を追放した。「光は暗きに照り、暗きは此れを曉らざりき。」「かれ己の國に來りしに、その民これを接けざりき。彼を接け、その名を信せし者には權を賜ひて、此れを神の子となせり。」此れらの部分は(6—13)ロゴスの化身に至るまでの此の世の存在である。(異教、及びユダヤ教に於けるそれの活動)然し乍ら最後に時熟し「道肉體となりて、吾等の中に宿れり、吾らその榮を見るにまことに父の產みたまへる獨り子の榮にして恩寵と眞理にて充てり。」

キリストは世界の支配者であると同時に世界の救濟者である。神から遣はされたる世界支配者として彼はキリスト(メシアス Messias 救世主)と呼ばれる。彼が存在しなかつた時はないが、彼が尙ほキリストではなかつた時はあつた。神的な前存在に於いては彼は尙ほキリストではなかつた。墮落したる人間、神から離れたる世界を神にかへさんが爲めに、彼自身神との合一を離れて神外的前存在へ踏み出すのである。此の神外的前存在への踏出しが彼のキリストとしての世界救濟への根源的意志であり、彼の活動の發端である。此れについて暗卽ち異教、ユダヤ教を照す光として、此の世に現はれるが、然し尙ほキリストとしてではない、最後に化身が續くのである。此處に於いて彼は身を下し、身を犧牲にして神に還る。彼の昇天の後には彼

に代つて彼が遣はしたる靈Geistによつて世界は支配される。此れは勿論此の世界の宇宙的(自然的)な靈ではなく、聖靈である。此れはキリストの此の世の支配、人間意識に於けるそれの現在を完成させるのである。かくて神、キリスト、聖靈、もしくは父、子、靈はその各々が神であり、そしてその合一が完全なる眞の神の統一をなす所の三人格である。此れがキリスト敎の三位一體の理念である。

創造及啓示の發展の進行はその最初の根據並に最後の目的を持つてゐる。根源的根據は凡てがそれの中に含まれてゐる所のかの統一、閉ざされたる神であり、最後の目的は凡ては啓示され、凡てに於いて神が顯はれたる狀態である。此の神的なる全一性觀を吾々はキリスト敎的、もしくはパウロ的汎神論と名づけることが出來る。此れは決して最初の統一ではなくして最後の統一であつて「最も高き、最も崇高なる一神論」である。(XIV, S. 66) 創造及啓示の發展過程は此の根源的根據から最後の目的へ過去、現在、未來の世代(アエオン)を通して進んで行くので、此の夫々の繼起的支配者は卽ち父、子、靈である。創造以前の時は特殊な意味で父の時代、現在の時は優れたる意味で子の時代、そして全創造の間の未來の時は聖靈の時代と云ふことが出來る。此れらの時は今迄單に歷史的もしくは宗敎史的に考へられてアエオン的に考へら

れず、父の時代は舊約の時代、子の時代は新約の時代、聖靈の時代は永遠なる福音書の時代として理解せられたが、シェリングでは更に擴張して考へんとしたのである。

要するにシェリングの解釋は繼起の概念を神的機制 göttliche Oekonomie の根本的なるものとして强調し、此の點よりヘーゲル説、並びに敎會説に反對したものである。敎會の敎義は神的三人格が本質上等しきことを敎へる。そして此れには本質の差異並びに同等が主張せられる。然し此の二つこそ云はば舟が乘り上げる所の暗礁である。本質の差異性をすてて同一性が主張せられるならば異端サベリアニズム Sabellianismus が生じ、又本質の同一性をすてて差異性が主張せられるならば異端アリアニズム Arianismus が生ずる。アリウス Arius はキリストの神外的存在の爲めにそれの永遠なる存在を度外視し、否定して彼を單に被造物としたのである。又神に於いて全く區別、多を認めないならば神の空虛なる一、ユニタリズム Unitarismus が殘るのみ。三人格の各々の神性が肯定せられ、一を無視して本質の差異性が强調せられるならば第三の異端、三神説 Tritheismus が生ずる。此の三神説は唯名論の人々によつて最も强く主張せられたのであるが、もし此れとユニタリズムとの何れかをとらなければならぬとすれば、シェリングはむしろ前者を選んだであらう。それは神

に於ける區別、多なくしては全く眞の神の理念が存し得ないからである。尙ほシェリングはアリウスがキリストの神外的存在を問題にしたことについて同感してゐるが、シェリングの思想は彼のみならず尙ほ、サベリウスやヨアヒムフォンフロリス Joachim von Floris のそれと、繼起及發展の概念を神的機制に適用したといふ點に於いて共通點を持つてゐると云ふことが出來る。

第三節　キリストの業

啓示は——その始めに於いても終りに於いても——自由の行、意志の行、從つて事實であつてその限り決して理性の根據から導かれ又アプリオリに基礎づけることの出來ないものである。先づ啓示せられ、然る後に理解せられねばならぬのである。從つて啓示の哲學は此の事實の承認を第一の課題とし、そしてそれの理解を第二の課題とする。啓示の最初の根源はかの人間の自由なる行、卽ち墮落の事實である。此れによつて人間は一旦克服したるかの自然過程に再び捕へられ、それを意識に於いて繰り返さねばならぬのである。此れが神話である。扨て此の墮落によつて諸勢位の秩序は逆となり、世界は神から離れ、神外的存在は更に抗神的 widergöttlich 存在となる。そして此れによつて又神の意志は非意志卽ち怒にかはり、支配すべきでは

なく從屬すべき所のかの自然根柢が働き出すのである。然し同時に神には此の破滅を豫知し、此の世の生起前にそれを恢復し、人類を救濟せんとの決意があつた。此の意志を成就することが卽ち啓示と呼ばれる。

墮落と救濟との二つは無限に深き――一つは人間の、一つは神の――自由の行である。此れらは凡ての必然性を、演繹を超越したる事實である。此れは若し起らなかつたならば全然理解され樣がない。アプリオリには理解されないで、唯だ生じた結果から明かになる外ないからである。此れが普通の理性を超越したる啓示の積極的な特質である。

救濟の働きは人間を神に還歸せしめること、もしくは神と人との媒介であるが、此れは神と同じく神的な、自由な、人格的な媒介者によつてのみなされうる。此れは從つて此の世に先立ち、創造に於いて働き、その道を照す所の神の子でなければならぬ。父はかかる子によつて世界を造り、又子が此の世に現はれ、支配することが創造の眞の目的であつたのである。

然し人間が救濟される爲めには神の子は彼自らの決意によつて父から離れて人の世に下り、肉體的な形に於いて生れ出で人の罪を自らに受けてそれを贖はなけれ

ばならなかつた。此れが人の子としてのキリストである。彼は人の子となつた。神から獨立し、神と等しくなり、此の世の支配者たることも出來たであらうが、彼は此の道を取らなかつた。神から獨立に得ることが出來たでもあらう所の此の榮光を子は輕蔑し、神に身を委せてキリストとなつたのである。此處にキリスト敎の根本理念がある。

扨て前の自然過程及び神話的過程に於いて述べた諸勢位の關係を此の場合に思ひ起すならば、絶えず高まり、暗を克服し、過程を眞に導く所のものは第二の勢位、もしくは解放する所の(自由にする所の)第二の神であつた。此れは啓示に於いては正キリストである。從つて一般に此の世に於いて——神話的世界に於いても——高め導く所のものは、その最も內面的な根基に於いてはキリストそのもの、かくれたる未だ顯はれざるキリストに他ならないのである。此處に實にシェリングのキリスト論の根本核心があると云ふことが出來る。

凡ての眞の宗敎は永遠なる、如何なる時代にも除外せられざる內容を持たなければならぬ。キリスト敎は從つて異敎に於いてもあつたのである。後者も本質に於

いては前者と同じ實體的內容を持つてゐるのである。此の眞の宗敎のもつ永遠なる內容への憧れこそ、既に此の世に現はれはしたが、尙ほ隱れたキリストの働きである。自然的宗敎を動かすものは單に自然的な勢位である。啓示に於ける眞の動因は人格そのものである。然し人格は自然的勢位とは離すことは出來ないが故に、內含的には異敎に於いても既にキリストは――たとひキリストとしてではないにしても――現はれてゐるのである。舊約に於いてはキリストは勿論キリストとして現はれたが、然しまだ單に來らんとするものとしてであつた。新約に於いて始めてキリストはキリストとして啓示せられた。(XIV, S. 77) 異敎に於いてはキリストは云はば盲人を育み、溫める所の太陽であつた、彼ら此れを見ることは出來なかつた。唯だ僅かに感じ又手さぐりするのみで眞の神を決して認識しなかつた。此の僅かに感ぜられたものとして、過去、現在、未來の神、惱み、死に、蘇れる神、ギリシアのディオニュソスやエジプトのオシリスを擧げることが出來る。

啓示は暗に於いて現はれ、從つて暗をそれの前提、克服すべき對立として持つ所の光である。それ故に此の暗、卽ち抗神的な實在性をそれは認めざるを得ない。此の點に舊約的啓示の制限が、卽ちエホヴァの宗敎がその根柢として持つ所の神話的素

材があるのである。此れの出發點は星辰崇拜 Zabismus である。天と地との支配者權力の神、クロノス風に支配し、アブラハムの服從を驗し、フェニキアのバールの例に從つて子の犧牲を命じる所の神である。成程彼はエロヒムの如く人間の犧牲を求めなかつた。イザークの代りに羊を受けたのであるが、然し眞の啓示の神は穩やかな、明るき、仁慈なる神であつて、恐ろしき、暗き、クロノス風の神ではない。此の點に於いてエホヴァは一面復讐的、嫉妬的、盲目的に、罰し、燒きつくす神であると共に他面慈みや恩寵を與へる神なる二面を有するのであつて、前の一面は彼に先立てる神を表はすものであつて、何人も絕滅せられずには見ることの出來ない所の「エホヴァの顏」である、後の一面は現はれるべき眞の神を表はすもので、これは「エホヴァの天使」である。

ユダヤ人の禮拜やその他種々の宗教的、迷信的律法をばシェリングは凡て神話的な要素として說明した。理論(テオリー)は成程一神論ではあつたが、實踐(プラキシス)は多神論であつた。ユダ及びベンヤミンの種族の歸國の後、一神論は始めて純粹なる姿を取り始めた、そして眞なる神の理念は以後民衆の中にではなく、豫言者の中に、メシアの信仰、未來の宗教(ユダヤの密儀)の中に生きたのである。豫言者の律法に對する關係は丁度前の

密儀の神話に對する關係と同じである。豫言者の宗教に於いて、かくれてはゐるが既にキリストが現はれてゐる。然し運命の手にあるところの一般民衆はかかるものより勿論除外される。

キリストの此の世の啓示、キリストとしての顯現は彼の誕生を以つて始り、彼の死、復活、昇天を以つて終る。そして此間の凡ての自由なる行、而かも父の意志との一致に於いて生じた行の中、最も重要なるものは化身と救濟の爲めの死である。

彼の化身もしくは自己放棄は自由に欲せられたる自己卑下である。若し神の子が自らを人の子となし、彼の根源的な神性と、彼の全き人間性との二つの本性をば自らに於いて合一しなかつたならば、かかることは起らなかつたであらう。此の二つの本性の關係をシェリングに彼のキリスト論に於いて特に强調してゐる。キリストはエウティケス Eutyches の教へる如く決して全然合一する所の二つの本性からなるのでもなく、又ネストリウス Nestorius の云ふ如く、全然離されてゐる二つの本性からなるのでもなく、又教會の教へる如く、混一せず而かも分たれずにある所の二つの本性からなるのでもない。シェリングによれば一般にキリストは二つの本性からなるのではない、二つの本性である、何となれば二とも彼の中にあるが故である。「キ

リストの人間性は唯だ放棄に連續的作用によつて成立してゐると考へられることが出來る」のである。(XIV, S. 184 ff. 192 ff.) キリストの自己放棄は彼の自己犧牲、十字架の死に至るまでの柔順を含んでゐる。此の死の意味は前キリスト教的世界、墮落した人類、神そのものへの關係に於いて確定せられる。ギリシア的並にユダヤ的犧牲に於いてもかかる死の前徵、云はば眞なるものの影像はあつた、然しそのもの自身が來る時、それの影は消え去る。(XIV, S. 175) キリストの犧牲の死は彼の自由から人間の爲めのみならず、人間に代つてその罪を自らに受けたのであるが故に、彼の死は贖ひの犧牲であり、人に代る所の、もしくは救濟する所の犧牲死である。此のキリストの受けたる人間の贖罪は神の側から見るならば神の宥和 Versöhnung Gottes である、神は今や彼の怒を放棄し、再び人間に身を向け、人間を受け入れ、自らへ歸らしめるのである。從つてキリストの犧牲死は同時に又神と人との間に新しき結合を作る所の宥和犧牲である。

神を單に超越的な創造者、立法者と考へるならばキリストの犧牲死をば單に報償說 Satisfactionstheorie の說く樣に神の滿足(報償)を得る爲めのものと見なければならぬであらう。然しかくては神の恩寵や正義は何處に認めるのであるか。

神のかかる超越性によつてはキリストの惱みや人間救濟の爲めの死は決して內的必然的のものとして理解出來ず、單に形式性として現はれるにすぎないであらう。シェリングは此れに對して神の內在性を强調した。實際此れによつて初めてよくキリストの救濟の業と犧牲死の必然性が明かになるのである。

扨てかの破滅によつて神の意志は怒にかはり、世界の秩序も逆轉したのであるが、此の人間の原罪及び墮落の結果は神から離れることであり、思ひ上つて自ら獨立して神に背くことである。かく此の神的なる怒の結果は卽ち呪ひ(神罰)であり、此れの結果は又死である。唯だ一つの恢復の道は神外的存在を投げ棄てること、自由意志で完全にすてること、我執をすて、身を卑しくして死——最も低き、恥づべき十字架の死に至るまで柔順なることである。此れら凡てがキリストによつて、唯だキリストによつてのみ爲された。彼のみが人間の原罪(根源惡)と神的なる怒を根柢から滅したのである。彼に從ふ所の凡ての人は神の中にあり、又生きる。此のまねび Nachfolge——キリストの模倣——は勿論再びかの暗き自然根柢たりし原理——此れは今や人間の原罪によつて再び起され、働き出して神的なる秩序や啓示に反對する原理にまで高められたのである——によつて阻まれ、引きもどされる。「かの反對せるもの

を維持するといふことは神の最の法則であるといふことも出來る。何となればそれはその根柢より云へば、それに於いて彼が最後に彼の神性の最も力强き肯定的なるものを引き出す所のものであるからである。此の法則を知る人こそ此の世の秩序に於ける謎を解決する鍵を持つ人である。かの反對なるものは到る處、神的秩序を引きもどす所のものである。(XIV, S. 195)

此の反對なるものの力が內から完全に破られ、克服せられたる後——キリストの犧牲死によつて——此の啓示の光の中に於ては、世界の諸々の力(自然的な力)を再び神化することは人間の意識にとつてはも早や出來ない。「キリストに於いて異敎及自然的宗敎は凡て死するのである」(XIV, S. 175)

第四節　惡魔論

以上述べた如く神的啓示に於いてもそれに對して反對して働く所の原理があり、啓示はかかる原理との鬪ひに於いて成就せられるのであるが、かかるキリストの國に對して凡ゆる可能的なる反抗と阻止とをなす所の反抗者がサタンSatanなる名で總括せられるのである。然し此れの內容については新約、舊約に於いて又種々の時代に於いて異つてゐるが故に、シェリングも此れの敍述に批判的部分と積極的部分

を分つてゐる。先づ批判的方面より述べて行かう。

此の世の王としての惡魔。異敎はキリスト敎には內的には克服せられてゐる筈であるが、然し尙ほ外的存在としては存續し、勢力をもつてキリスト敎に反抗するが故にキリスト敎は此れを惡魔の作つたものと見、更には異敎の對衆そのものを惡魔と見るに至る。異敎は此の世の世界的宗敎なるが故に、惡魔は又此の世の王として現はれ、不信者の眼を眩ますのであると考へられた。(2. Kor. IV. 4)

創造の敵としての惡魔。次には惡魔は又誘惑、眩惑の精として現はれる。蛇の形に於いて人間(アダムとイヴ)を誘ひ、神に背かしめ、罪と死におとしめるのである。誘惑の目的は神より獨立の自己を立て、無制限なる意欲、空想されたる全能を得んとすること、かくて最低の勢位としてあるべき所のものを、破壞的に、創造に反抗するものとして現はれしめることである、此れは創造の敵、破壞の原理としての惡魔である。惡魔の本質は普通に考へられる樣に、制限、缺陷にあるのではなくして、むしろ反對に無制限性にあるのである。彼は凡ゆるものの中、最も制限せられたるものではなく、最も制限せられざるものである。

神の道具としての惡魔。惡魔を天使と見、神の道具と見る見方は、神に反するもの

と見る先きの諸々の見方とは反對である。ヨブ記の惡魔は然し此れである。此處に於いては惡魔は神の天使の中の一人であつて神の命によつて、ヨブを試みるのである。ヨブを決して誘惑し、破滅せしめるのではなくヨブの義が、凡ゆる惱みの中にあつても、ゆるがないか否かを驗し、かくて未決定のものが決定され、疑はしきものが確かにならんが爲めである。此の云はば判官の役を惡魔は神に對してなすのである。從つて惡そのものが惡魔を喜ばすと云ふこと、又彼は惡を啓示するのみならず、又惡を起さすと努めるものであるといふ事は云はれない。

然し乍ら若し惡魔が人間を神から離し、此れに背かしめる所の誘惑者、破滅者であるならば、彼は離反と罪との惹起者である。かくては彼はも早や神の天使ではなくして、惡しき天使、卽ち惡の原理である。パウロやヨハネの書にはかかるものとして惡魔は描かれてゐる。

然し此の惡の力そのものが果して惡であるか、と云ふ問が生ずる。惡魔は造られたものであるか、又造られざるものであるか。

次にはシェリングの積極的な說明に入る。

非有の原理としての惡魔。惡魔は決して單なる被造物ではない。若しかかるも

のならば彼は自負より墮落し、嫉妬から神に背いて人間を教唆はしたが本來は善なる所の天使であるであらう。卽ちルチフェル Lucifer であるであらう。然し惡魔が被造物であると云ふことは聖書にも勿論なし、又キリストの誘惑が被造物によつてなされたといふことは不可能である。のみならず被造物がかくの如き偉大なる力を持つといふ事も不可能であらう。從つて惡魔は原理である。然し決して永遠なる原理ではない、何となればそれは全く克服され、否定される時が來るであらうからである。從つてそれは創造並にその働きに反抗し、從つて此れを前提する所の一つの造られたる原理 ein gewordenes Prinzip である。凡ての存在の第一の勢位をなす所のもの、單なる盲目的なる意欲、無制限な、汲み盡し得ない深き可能性、存在し得るもの、從つて凡ての現實的存在を除外し、それ故非有の特性を有する所のもの、事物の根柢に縛りつけられてはゐるが、否定せらるべき所のかの勢位が惡魔に於いて原理として、人間の墮落によつて再びめざまされ、かき立てられたる力として現はれるのである。

此の無制限なる意欲は凡ての造られた具體的なる存在に對立し、それに反抗するが故に、惡魔は創造に反するもの、破壞的原理として現はれるのである。又此の無制

限なる意欲は無制限なる力の假象を、偽りの全能を含むが故に、惡魔はかの欺きの魔力――人間は彼の意志そのものに於いて到底此れより免れ得ない樣に感ずる――の原理として現はれる。人間の意志に對する惡魔の此の實在的なる力、此處に彼の眞の存在があるのである。

虛偽の原理としての惡魔。惡魔は又虛偽、欺瞞、策略の父である。此れらは非有の領域より出づるのである。盲目的なる我執からの最も内的なる出來事、かの人間の墮落は神話的なる意識にも現はれるが、かかる意識にとつては此れは單に外的なる出來事、卽ち樂園に於ける蛇の誘惑として現はれる。

かくて惡魔は又罪ある、我執に眼眩める人間の父として現はれる。「汝らおのが父なる惡魔より出づ」(Joh. VIII. 44.) 彼は又現實への永遠なる憧れである。それ故に使徒は惡魔を飢えたる獅子にたとへてゐる。又それは充たされざる渴きであるが故に、沙漠にたとへられ、沙漠は惡魔の住家と見られたのである。

凡ての人間はかくの如き惡魔的な力によつて生れ、又それによつて、彼(人間)の意志の根柢に於いて引きづられてゐるのである。此の點に實に原罪が、又カントの云ふ根本惡が成立するのである。此れは實に人間の善なる意志にさへも秘かに入り込

み、例へば最も親しき友情に於いてもその信頼を計り、又最もよき友の不幸に於いても共に悲しまない所のあるものを覺えしめるのである。

歴史を動かす原理としての惡魔。惡魔の誘惑は此の世の凡ゆる僞の價値を持ち、人間の我執の深さに徹してゐるが故に、同じく吾々を欺く感官の誘惑よりも遙かに力强く、又深く大きい。實際惡魔は僞なるものを眞に、存在せざるものを存在するものに思はせるのである。此の點に於いて惡魔は又ソフィストである。

吾々はかかる欺きをさける爲めに、それを敎訓によつて認識すべきであるのみならず、又それを克服する爲めに、自らの經驗からそれを體驗すべきである。それは克服によつてのみ眞に自由となるからである。そしてかかるものの最もよき敎育は世界なる學校、生活なる試驗である。それ故に惡魔が吾々にかける所の目的によつて吾々は常に刺戟され、ひき起されて行動にまで驅り立てられると云ふことはよいことである。さもなければ吾々の力は全く用ひられず、試されずに終るが故である。此の點である。此の點に於いて惡魔は人間の發展に對して必然的な、有益なる活動をなすのである。かかる活動がなければ人間の生活は、從つて又歴史は眠り鈍磨し、停止するであらう。惡魔は實に歴史を動かす原理 Principium movens である。此れが

悪魔の持つ眞の哲學的な理念である。

悪魔の二重性。以上述べた所によつても察せられる如く悪魔は全く二重的なる性質を持つてゐる。彼については二通りの考方が可能なるのみならず、又必然的である、自體に於いて二重的である。卽ち一面に於いて彼は絶えざる反抗者、矛盾の產出者、凡ての離反の創設者であり、悪の創作者であるが、他面に於いては許されたる、少くとも手段として欲せられたる原理である。彼は創造の敵であると同時にそれの一手段(道具)である。實際創造が眞の創造であらんが爲めにはかかるものでなければならぬ、何となれば創造に反する所の凡ての可能性が示され、そして明かにされると共に、同時に克服されない限りは創造は完全なる眞理を持たないが故である。かかる立場から云ふならばかの原理は隱れたる悪を顯はにし、此の悪の顯現を喜ぶ所の原因ではあるが、然し自分自身は悪ではないのである。何となれば神自身むしろそれを許すから、否欲せねばならないからである。(勿論自體に於いてではなく手段として)(XIV, S. 274) そしてかかる悪魔觀は又「常に悪を欲して常に善をなす所の力」として描かれた「ファウスト」に於けるゲーテの悪魔の思想でもあつたのである。

(終)